



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代日本語における「『見越しの評価』を表す副詞」の研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	林, 恒立
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12288号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61546
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Hengli_Lin_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：林 恒 立

審査委員	主査	教授	上	田	雅	信
	副査	教授	大	野	公	裕
	副査	准教授	飯	田	真	紀

学位論文題名

現代日本語における『見越しの評価』を表す副詞の研究

本研究は、渡辺（1980）が、話者の評価(見越しの評価)を表すと述べた一群の副詞のうち、「基本的に複文で使用されるという構文上の制約」に従う副詞である「せっかく」「なまじ」「あまり」に、これまで議論されていなかった「だだでさえ」を加えた4つの副詞を対象とした記述的な研究である。

本研究では、まず、これまでの日本語の副詞の研究史を概観し、その中に「見越しの評価」を表す副詞の研究を位置付けたうえで、その3つの問題点、すなわち、「見越しの評価」についての議論が十分に行われていないこと、この副詞に関するデータの収集が限られていること、この類の副詞の体系的な比較と中核的な性質の解明が行われていないことを指摘した。次に、方法論として内省・作例を用いた方法に加えて、コーパスを用いた方法を併用することが必要であることを論じた。その上で、基本的に複文の従属節で使われる上記の4つの副詞を対象として、その構文的特徴と意味的特徴を、内省と作例に加えてコーパスデータを分析することによって記述した。

本研究で対象とした「見越しの評価」を表す副詞に共通する構文的特徴としては、複文の従属節に現れ、主文や単文には現れないことに加えて、圧縮用法と呼ばれる複文構造を持たない文に現れる用法があること、さらに、一見単文に見える文に現れる破格用法とここで呼ぶ用法もあることについて論じた。また意味的特徴については従属節の述語の動作性や状態性に関する制約が副詞によって異なること、この副詞が生起する従属節の表す事態が既定性を持つこと、見越しの評価の副詞を含む従属節と主節の間に価値のある命題(前件)と前件の命題の価値を完全なものにするものとして見越された命題(後件)という意味的な関係が成立していなければならないことなどを論じた。また構文的特徴として上にあげた圧縮用法や破格用法の場合にも、この意味的關係は満たされていることが示された。

本研究では、上記の4つの副詞それぞれの構文的特徴と意味的特徴を明らかにすると同時に、これらの副詞に共通の特徴と個々の副詞で異なっている特徴が明らかになった。さらに、副詞ごとに異なる性質は、それらの副詞が基本的な性質として程度副詞の性質を持つのか陳述副詞の性質を持つのかによることを論じた。この意味で本研究は、従来の研究において個別的に研究されていた「見越しの評価」の副詞を体系的に比較し分析する試みとして評価できるものである。

審査は1時間50分にわたって行われた。まず、博士論文提出者が約30分間論文の内容についての発表を行った。次に、審査委員及び出席者との間で45分間質疑応答が行われた。その後で審査委員のみで主として本論文の研究成果のこのテーマの研究への貢献という観点から35分間審査を行った。その結果、審査委員は、次の3つの点で本論文を高く評価し、その意義を認めるものである。

まず、第一に、本研究は、これまで個別的に研究され、体系的な比較や分類が行われていなかった話者の評価（見越しの評価）を表す一群の副詞を複文に現れるものに限定して分析し、その共通の性質と違いを明確にした点で評価できる。

第二に、論文の構成が体系的で明快であることがある。また方法論としても従来の内省と作例による方法に加えてコーパスを用いる方法を積極的に併用することによってデータの範囲を広げ、従来気づかれにくかった用例を発見し分析したことがあげられる。

第三に、「ただでさえ」というこれまで気づかれていなかった「見越しの評価」を表す副詞の分析を行い、この副詞が見越しの評価の副詞が共通に持つ構文的特徴と意味的特徴を持つことを明らかにしたことがあげられる。

その一方で、問題点としては次の3点が指摘された。まず、第一に、特に順接、逆接といった接続形式の分類において構文的特徴と意味的特徴が十分に明確に区別されていないため、複文での用法と圧縮用法や破格用法との共通性が十分に捉えられていないことがある。第二に、圧縮用法と呼ばれる用法の中に構文的に異質な用法が明確に区別されないまま含まれていることが指摘された。第三に、見越しの評価の副詞が意味的な特徴として共有すると考えられる従属節が表す事態の既定性の制約の性質は「なまじ」と「あまり」は他の2つの副詞と異なるが、その分析が十分に明確でないことが指摘された。

いくつかの問題が今後の課題として残されてはいるが、上記のような貢献を「見越しの評価」を表す副詞の研究に対して行ったという観点から本論文は学術的意義を持つものとして評価できる。したがって著者は、北海道大学博士（学術）の学位を授与される資格があるものと認める。